



## 校長室だよ

自立に向かって「自分から」

学校と家庭・地域を結ぶ架け橋通信  
第12号 令和4年10月19日  
小美玉市立美野里中学校

### 私の「読書歴」を振り返る

「読書の秋」と言われますが、読書は、季節を問わず、人が生きていく上でとても大切なものだとは私は考えています。

読書の大切さについて、「読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないもの」などと説明されます。そのとおりだと思いますが、今回は一般的なことではなく、今日に至るまでの自分の読書の経緯を振り返ってみたいと思います。皆さんが感じたことがあったら、重ね合わせていただくとよいかもしれません。

振り返ってみると、私は、決して小さい頃から本の虫ではありませんでした。それでも、幼稚園の先生や母親が絵本の読み聞かせをしてくれるのは、楽しく思っていました。小学校のときは、「音読カード」を渡され、国語の教科書を親の前で音読し、サインをもらうというのが習慣になりました。暗記するほど教科書は読みましたが、読書の楽しさを味わったかというところではなかったように思います。(テレビの全盛期だったので、ウルトラマンや仮面ライダーに夢中になり、本よりも映像に興味をもっていました。その後、映画館にもよく行くようになりました。映画好きは、今日も変わっていません。)

それでも、印象に残っているのは、小学生向きに書かれた落語の本でした。その中で「寿限無」というお話に出てくる主人公の日本一長い名前を覚えるのに、何度も何度も読みました。(皆さん知っていますか？ 寿限無 寿限無 五ここのすり切れ… 今でも言えますよ。今でも落語が好きです。特に、古今亭志ん朝が好きです。)

中学生の時は、「読書カード」が配られました。あまり難しい小説には挑みませんでしたが、未来志向とブラックユーモアの星新一が好きでした。

高校生になり、思春期後期で、進路選択を迫られた時期には、将来何になりたいのかを真剣に考えるようになりました。そのとき出会った五木寛之の小説や加藤諦三の著作を、これはむさぼるように読みました。(結局、これからのことは、とりあえず大学に行ってから考えようということにしたのですが。)大学に行って、驚かされたのは、他の人はこんないろいろな本を読んでいるのかということでした。カルチャーショックでした。読書会で読んだ本など、最初は1ページも理解できませんでした。大学に行く道々に古本屋が並んでいたため、高価な本は買えませんが、なるべく本は買うようになりました。

教員になってからは、最初、小学校の担任だったのですが、指導法に悩み、教育書を読むようになりました。また、何度か精神的に落ち込むようなことがあったときには、自分を励ましてくれるような本や心理学の本などを読みました。

それから今日に至るまで、週末、よく図書館に行くようになりました。今、自分が困っている分野や興味のある分野の本棚の前に行って本を探します。やはり、読書というのは、ただ漫然と読んでいるより、そのときの自分に必要な本が一番役に立つし、身に付くようです。また、自分が体験できないようなことを、疑似体験できるのも読書の楽しみだと思います。

一見、黙って本に向かい合っているようでも、頭の中・心の中は、自由に、エキサイティングにフル活動している。それが読書の醍醐味だと思います。

ぜひ、ご家族みんなで読書を楽しむ雰囲気をつくっていただき、子供も大人も、心揺さぶられる知的な冒険をしていただければ幸いです。

